

第5節 構内遺跡に関する研究

1. 鹿田遺跡第22次調査地点出土近世・近代遺物の検討

岩崎 志保

a. 近世～近代遺構の出土資料について

鹿田遺跡第22次調査は2011年度におかやま地域医療人育成センター新営に伴い発掘調査を実施し、2023年度に『鹿田遺跡17』（以下本報告書とする）として報告書を刊行したものである¹⁾。本調査地点は、1928（昭和3）年に売却されるまで最後に残っていた民有地にあっており、発掘調査では最も新しい時期の遺構として、近代の庭園遺構2基を検出した。

明治時代に作成された切り図ほかのデータを参照すると、検出された庭園遺構は北側のSG2が岡6番160番地に、南側のSG1が岡6番158番地にあたることが判明した²⁾。前者は1904（明治37）年～1928（昭和3）年間の、後者では1902（明治35）年～1925（大正14）年間の所有者の記録が残る。鹿田キャンパス内の民有地は1928（昭和3）年までに岡山医科大学に移管されたため、これらの庭園遺構の下限は明らかである。一方造営時期については出土遺物から江戸時代後期以降と報告した。

本報告書では時期の決め手となる遺物を取り上げるに留め、特に近代の遺物の詳細には触れていなかったことから、本稿ではまず庭園遺構に関連する出土遺物を紹介し、次いで本報告書に掲載できていなかった近世・近代の種子同定結果を報告する。

b. 第22次調査地点出土陶磁器の概要

本報告書の刊行後ではあるが、現在、近世～近代を主体に出土遺物の整理を継続している。鹿田遺跡のなかで当該期の状況がわかる地点は稀有であり、また本地点の出土遺物については19世紀の一括資料として捉えることの重要性を指摘したい。

その整理方法として第22次調査地点で出土した全陶磁器の概要を捉えることで、本地点の利用状況、すなわち庭園遺構の造営から廃絶までの状況を掴めると考えた。まだ作業は継続中であるため、ここでは概要を示し、詳細は稿を改めることとする。

本地点出土陶磁器は総計2,198点、うちSG1出土が1,725点で78%を占め、SG2出土が82点（4%）、残り18%が造成土・攪乱からの出土である（表6）。時期的な比率では、

中世の貿易陶磁器は14点、近世のうち明らかに江戸中期までの古手のものは130点余であり、あわせても1割に満たない（表7）。大半が19世紀代、江戸時代後期以降にあたる。そのなかで磁器染付については、染付の技法等により、細分した位置づけが可能であり、今後の作業により時期を詰めることが可能である。一方、陶器については19世紀代～現代にいたる仕分けが難しく、江戸後期以降として一括記載している。そのなかで98点は岡山医科大学病院の備品と判明するものである。

このように概観すると、検出された遺構とその廃絶時期から、本地点出土陶磁器の大半は江戸後期以降のものであり、特に19世紀の一括資料として有効なものと評価することができる。そのなかで本稿では江戸後期～近代の遺物4点を紹介する。

表6 第22次調査地点出土陶磁器点数

遺構	点数
SG1	1,725
SG2	82
その他	391
計	2,198

表7 時期別出土点数

種類	中世	江戸中期まで	江戸後期以降
磁器	14	64	904
陶器	—	65	1,151
計	14	129	2,055

c. 煙管2点 (図41)

いずれも形態的特徴から「刀豆煙管」と呼称される。1は磁器製で、長さ14.3cm、最大幅1.7cm、最大厚1.0cmを測り、火皿部が欠失している。瀬戸染付焼で、藍色の絵付けが施される。文様は胴部表面から裏面へ草葉文を繊細な筆遣いで描くものである。

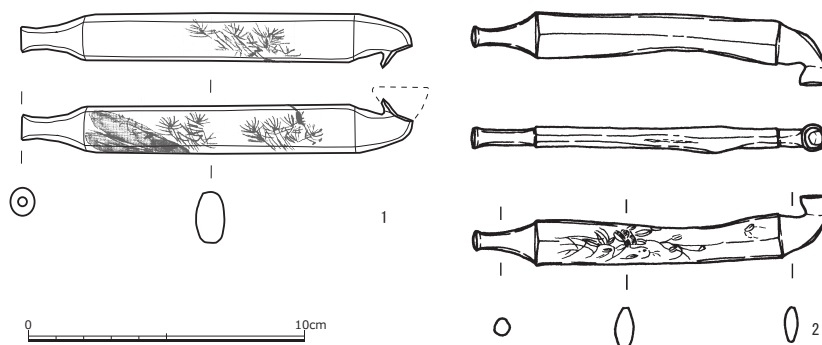


図41 煙管

通常刀豆煙管の文様は片面に施されるが、本資料は表面から側面上部、裏面へと連続した文様構成となっており、より丁寧なつくりと思われる。SG 2 水路の南石垣中から出土した。瀬戸染付は19世紀初頭からの操業とされ、繊細な文様を有する煙管は人気商品のひとつとされる³⁾。

2は金属製の刀豆煙管である。本報告書でも掲載した⁴⁾。長さ12.8cm、最大幅1.5cm、最大厚0.7cmを測る。完形品であるが、胴部に一部潰れが認められ変形している。胴部表面に草木文を施し、浮文は銀製の可能性がある。SG 1 東護岸から出土した。

これら2点の煙管は、素材は異なるものの、懐中にいれて携帯する際に邪魔にならないよう扁平な形状とした刀豆煙管であり、製作年代としてはともに19世紀初頭、江戸時代後期と位置付けられる資料である。

d. 容器2点 (図42)

3は常滑焼のインク瓶で、注ぎ口にわずかに欠けがあるほかは完形である。器高20.7cm、底径9.8cmを測る。口径は4.3×5.3cm、円形の口縁の片側を引き出し、片口状に仕上げている。外面下方に径1.9cmの円形刻印があり、中央に大きく「M」と周囲に「MARUZAN INK ★ TOKYO ★」の文字が読み取れる。内面に触れると指に黒色の着色がみられる。

1869(明治2)年創業の丸善株式会社では、1885(明治18)年より同社工作部でインク製造を開始したとあり、その容器としてガラス瓶が高価であったため、昭和の初めまでは常滑焼の瓶が使われていた⁵⁾。本資料はそのインク瓶である。

本資料は造成土出土であり、時期は限定しえないものの、本調査地点の庭園遺構あるいは本地点に存在した邸宅に由来する可能性が高いものとする。完形品の出土はこの一点のみであるが、同様のインク瓶片はほかに4点認められる。

時期としては丸善の刻印があること及び庭園遺構の埋没時期を併せ、昭和初めころのものと考えられる。

4は陶製容器で、口径4.8cm、底径4.4cm、器高5.5cmを測る。口縁直下に段が認められ、蓋の形状は不明であるが蓋付の容器となるものであろう。本資料は廃棄後火を受けたあるいは高熱化にあったと見られ、器表面に溶解したガラス質や小礫が付着する。

外底面に刻印「EXTRACTUM CARINIS LIEBIG LONDON 56 G □」が読み取れる。「EXTRACTUM CARINIS LIEBIG」は牛肉から抽出したエキスとして販売されていた商品名であり、栄養価の高い代替肉として本物の肉よりも安価で販売されていた。「LONDON」の刻印から英国ロンドンにある会社を取り扱っていたことを示しているとみられる。

牛肉エキスは1847年にドイツのリービッヒ男爵が開発し、ロンドンにこれを取り扱う会社(Liebig's Extract of Meat Company)が設立されたのは1865年である。ほかにも同様の商品を扱う会社が複数あったため、

「LEMCO」の名称で販売されることとなった。その形状は「蜂蜜のような黒いスプレッドで、不透明な白いガラス瓶に包装されており」と記載がある。本資料はこの容器にあたるものであろう。同社は1924年に他社の買収により社名変更となる。それまでに本製品は英国だけでなく世界各地へ輸出された⁶⁾。

刻印には年号等時期のわかるものは見られないが、商品名・会社名を考慮して1865～1924年の範疇の産である可能性が高いと考える。日本では幕末～近代にあたる時期の輸入品であることは疑いない。滋養の高い商品であり、本地点の邸宅に由来するものか、軍隊⁷⁾や病院で使用されたものの可能性も考えられる。

e. 鹿田遺跡第22次調査地点出土種子の同定

鹿田遺跡第22次調査地点出土種子のうち、土壌のフローテーションによって抽出した微小種子については、本報告書⁸⁾において報告済みである。このほかに土器や石器と同様に通常の発掘調査過程で出土した比較的大型の種子については未報告であったため、本稿にて報告を行う。①近代の庭園遺構から出土した種子類、②モモ等の大型の種子の2つに分け、前者は岡山理科大学那須浩郎氏により撮影・同定を行い、有益な教示を得た。後者については本部門において撮影・分類したものである。

①鹿田遺跡第22次調査出土大型種子（図43 表8）

17個体を抽出し、撮影と種の同定を行った。その結果6種を同定できた。詳細は表8を参照されたい。カボチャ属の種子⁹⁾は5個体確認され、いずれも庭園遺構1の南側から出土している。メロン仲間種子は2個体あり、そのサイズからマクワウリ・シロウリ型とされる¹⁰⁾。

②その他の大型種子（図44 表9）

35個体を抽出した。モモ31個体、落花生の種皮4個体である。モモには弥生時代後期の13個体のほか、近世3個体、近代14個体がある。鹿田遺跡出土モモについては南（2020）により弥生時代～近世の出土資料がまとめられているが、それらにさらに近代の資料も加え、モモ利用について明らかにするデータが得られた。サイズ計測の詳細は稿を改めることとするが、図44を見ても弥生時代から近代へと大型化が明瞭に進むことが明らかである。

本稿で報告した種子には、モモ、落花生のほか、ウリ（マクワウリ・シロウリ）、カボチャ、トウガン等現代でも食用として身近な種が含まれていた。鹿田遺跡において近世・近代の種子資料はこれまでほとんど抽出しておらず¹¹⁾、今後当該期の生活復元のうえで有益な資料と言えよう。

f. 小結

前半で、鹿田遺跡第22次調査地点の出土品4点を紹介した。煙管2点は江戸時代後期のもの、また容器2点は造成土出土で時期を限定できないが、可能性としてはいずれも昭和初期前後の可能性が高いものである。2点とも刻印が判別できたことから、その背景を少し紐解いてみることができた。

こうした近世、近代以降の出土品からも当時の時代背景やここで展開された歴史を窺い知る一助となる。先に述べたように、第22次調査地点の近世・近代の遺物については陶磁器を手掛かりに、もう少し詳細を詰めていく予定である。

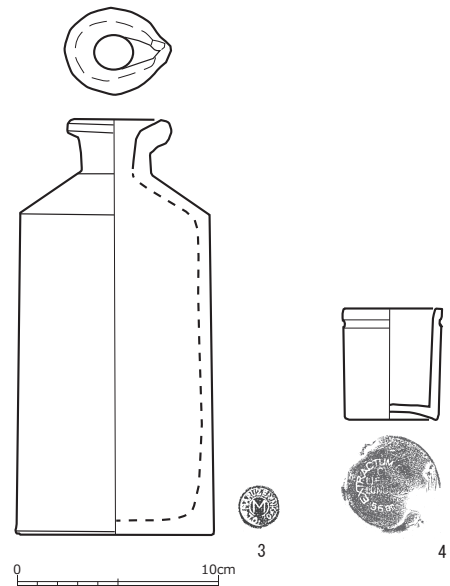


図42 容器

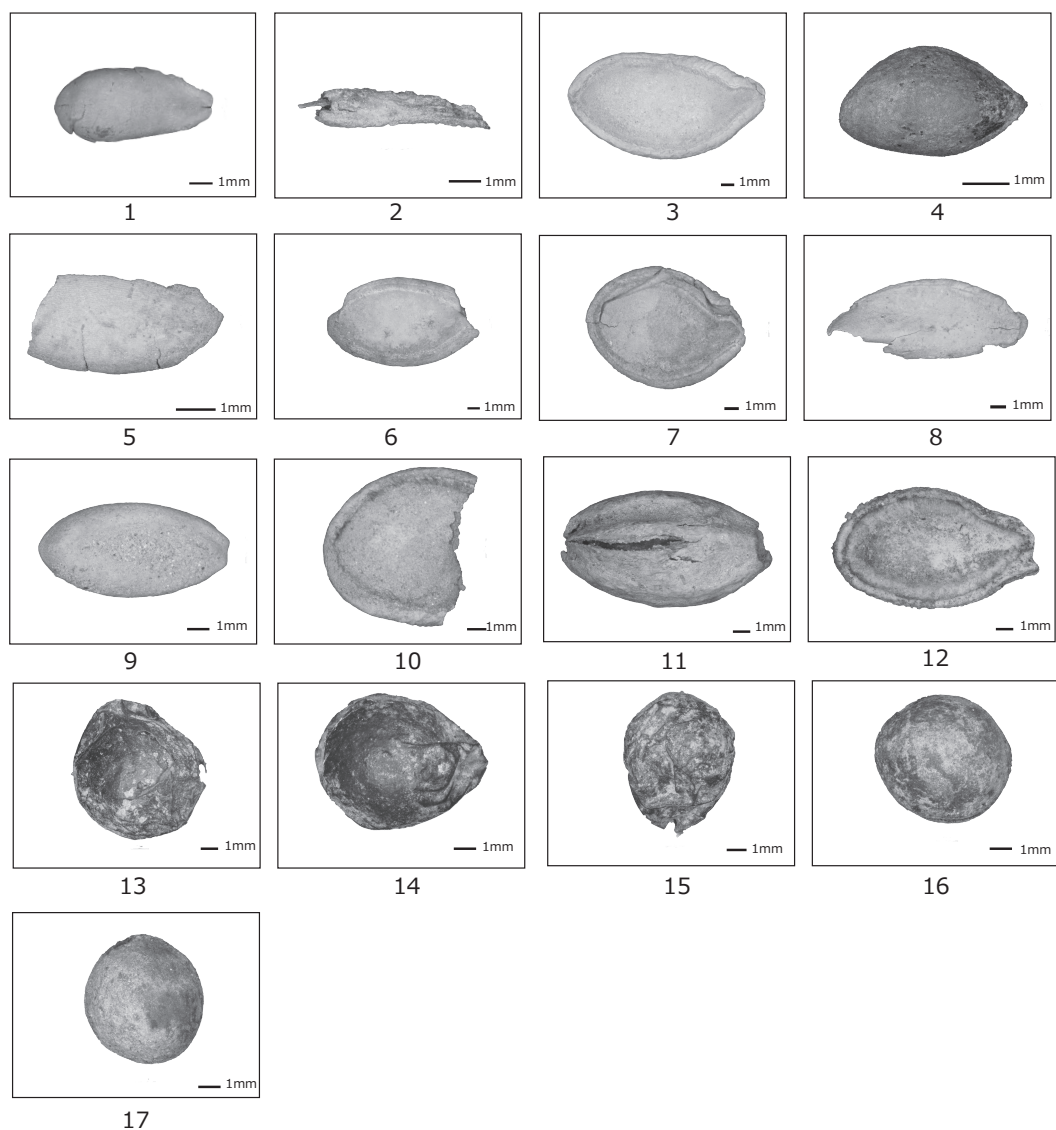


図43 鹿田遺跡第22次調査地点大型種子

表8 鹿田遺跡第22次調査地点大型種子一覧

番号	遺構名	時期	種名	学名	所見ほか
1	SG 1 北護岸	近代	メロン仲間種子 (外種皮)	<i>Cucumis melo</i>	7×3.35mm、マクワウリ・シロウリ型
2	SG 1 北護岸	近代	不明植物片 (茎・根)		
3	SG 1 南護岸	近代	カボチャ属種子 (外種皮)	<i>Cucurbita</i> sp.	比較標本不足のため、セイヨウカボチャ、ニホンカボチャ、ペボカボチャのうちのどれかは不明
4	溝 7	近代	マツ属種子?	<i>Pinus</i> sp.?	
5	溝 7	近代	メロン仲間種子破片	<i>Cucumis melo</i>	
6	SG 1 水路 1	近代	カボチャ属種子 (外種皮)	<i>Cucurbita</i> sp.	
7	SG 1 水路 1	近代	カボチャ属種子 (外種皮)	<i>Cucurbita</i> sp.	
8	SG 1 水路 1	近代	カボチャ属種子 (外種皮)	<i>Cucurbita</i> sp.	
9	SG 1 水路 1	近代	メロン仲間種子 (外種皮)	<i>Cucumis melo</i>	7.37×3.65mm、マクワウリ・シロウリ型
10	SG 1 水路 1	近代	カボチャ属種子 (外種皮)	<i>Cucurbita</i> sp.	毛があるのでニホンカボチャに近い?
11	SG 2 水路	近代	センダン核 (内果皮)?	cf. <i>Melia azedarach</i>	核の中に種子が入っている
12	造成土		トウガン種子 (外種皮)	<i>Benincasa pruriens</i>	
13	造成土		クスノキ果実	<i>Cinnamomum camphora</i>	
14	造成土		クスノキ果実		
15	造成土		クスノキ果実		
16	造成土		クスノキ種子		
17	造成土		クスノキ種子		

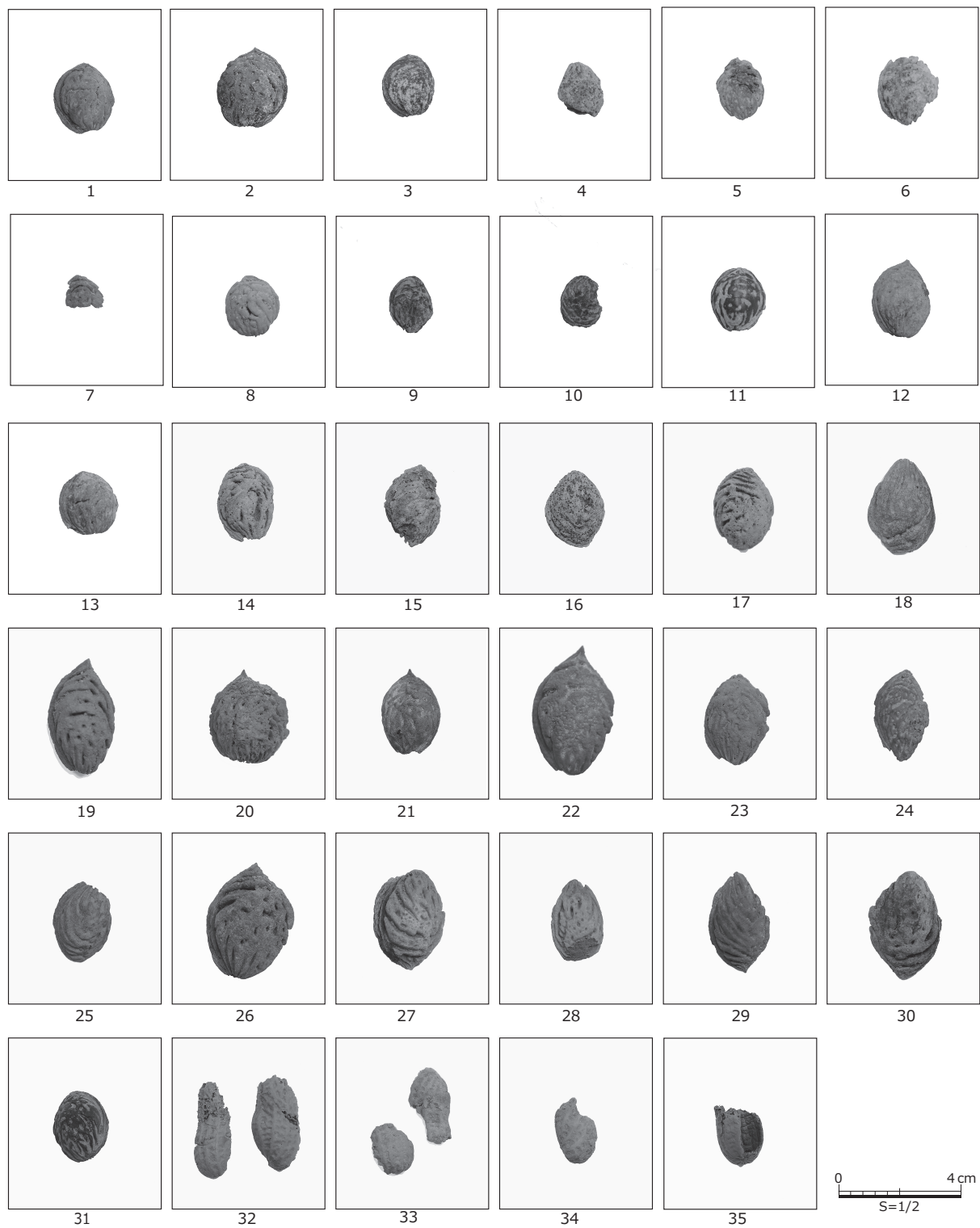


図44 鹿田遺跡第22次調査地点出土桃・落花生

後半では本報告書で掲載できていなかった種子についての同定結果を報告した。特に食利用の多様な状況を窺い知るとともに、桃については通時的にサイズの変化を捉える良好な資料が増えたと評価できる。今後検討を進めたい。

表9 鹿田遺跡第22次調査地点出土桃・落花生一覧

番号	報告時	時期	分類	番号	報告時	時期	分類
1	土坑3	弥生時代後期	モモ	17	SG1南護岸	近代	モモ
2	井戸1	弥生時代後期	モモ	18	SG1水路1	近代	モモ
3			モモ	19	SG1水路1	近代	モモ
4			モモ	20	SG1水路1	近代	モモ
5			モモ	21	SG1水路1	近代	モモ
6			モモ	22	SG1水路1	近代	モモ
7			モモ	23	SG1水路1	近代	モモ
8	土器集中3	弥生時代後期	モモ	24	SG1水路1	近代	モモ
9	土器集中1	弥生時代後期	モモ	25	SG1水路1	近代	モモ
10			モモ	26	SG1北護岸東側	近代	モモ
11	8層	弥生時代後期	モモ	27	SG1北護岸東側	近代	モモ
12	10層	弥生時代後期	モモ	28	SG1北護岸東側	近代	モモ
13	10層	弥生時代後期	モモ	29	SG1西杭列	近代	モモ
14	土坑10	近世	モモ	30	SG1北護岸東側	近代	モモ
15			モモ	31	側溝	—	モモ
16	井戸9	近世	モモ	32	SG1	近代	落花生
				33	SG1水路1	近代	落花生
				34	SG1水路1	近代	落花生
				35	SG1北護岸東側	近代	落花生

註

- 1) 岩崎志保編2023『鹿田遺跡17』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第40冊 岡山大学文明動態学研究所文化遺産マネジメント部門
- 2) 岩崎志保2024「鹿田遺跡における近世の土地利用」『鹿田遺跡17』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第40冊 岡山大学文明動態学研究所文化遺産マネジメント部門
- 3) 類例を発掘調査報告で見つけることはできなかったが以下が良好な資料である。
岩崎均史2000「喫煙具」『日本の美術』第412号 第12図
- 4) 註1 文献、p.67 図70-M5
- 5) 丸善雄松堂株式会社ホームページによる。https://yushodo.maruzen.co.jp/manabi_tsunagari/methods/methods-03/
- 6) Liebig's Extract of Meat Companyに関する記述は下記参照（最終閲覧2024. 8. 27）
https://en.wikipedia.org/wiki/Liebig's_Extract_of_Meat_Company
- 7) 本調査地点南側の敷地（岡6番158番地）の所有者は陸軍に関連する人物であることが判明している。
- 8) 木村理・沖陽子2024「鹿田遺跡第22次調査地点出土種子と土器圧痕同定」『鹿田遺跡17』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第40冊 岡山大学文明動態学研究所文化遺産マネジメント部門
- 9) 比較標本不足のため、セイヨウカボチャ、ニホンカボチャ、ペポカボチャのうちのどれかは不明。
- 10) 藤下（1992）は、メロン仲間の種子サイズから、長さが6mm以下をザッソウメロン型、6.1-8.0mmをマクワ・シロウリ型、8.1mm以上をモルディカメロン型とした。
- 11) 田中・加藤（2013）により近世土坑出土のウリ種子の検討がなされている。

参考文献

- 田中克典・加藤錬司2013「メロン仲間の種子遺存体における形態分析とDNA分析」『紀要2012』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 那須浩郎・山本悦世・岩崎志保・山口雄治・富岡直人・米田穰2020「津島岡大遺跡から出土した植物種子の再検討」『紀要2018』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 藤下典之1992「出土種子からみた古代日本のメロン仲間—その種類、渡来、伝播、利用について—」『考古学ジャーナル』354
- 南健太郎2020「弥生・古墳時代におけるモモの利用について」『紀要2018』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター